

幻の古代道路を追って

池田 誠一

■【5】熱田台地の拠点…新溝の駅■

1 新溝駅の候補地

前回到達した露橋から東に行く道は、市道山王線の中をまっすぐ古渡に向かっていきます。この古渡は、名古屋の中心部を構成する熱田台地の上にあり、先史時代からの多くの史跡が集中する地域です。注目されるのは古代の史跡が集中していることで、郡の役所や東海道の駅家があったのではないかと指摘されています(図1)。

10世紀の和名抄に記された古代東海道の駅家には、馬津駅、両村駅の間に「新溝駅」がありました。古渡は、津島が想定される「馬津

駅」と、二村山付近が想定される「両村駅」のほぼ中間にあたります。このため古渡は、古代の史跡群と相俟って新溝駅の有力候補地になっているのです。

今回は、露橋から市道山王線を東に、古代の史跡が集中し、古代東海道の新溝駅の有力候補でもある古渡へと歩を進め、付近の古代史跡を訪ねてみたいと思います。

2 古渡というところ

(1)「古渡」と「新溝」

古渡という地名は、古い渡りがあった所だと理解され、鎌倉時代の和歌に出てくることから、古くからの名前と考えられます。しかしその渡りはどこにあったのかということになると、熱田台地の西側と東側とに意見が分かれています。

西側だという説は、古くは西側がまだ海で、そこに湊があったところの陸地化が進み、熱田に新しい湊ができたために古渡と呼ばれたというものです。一方東側という説も、東側の低地が海から陸に変わ



遺跡名	主な時代
1 尾張元興寺	奈良～中世
2 東古渡町	弥生～中世
* 金山北	弥生～平安
3 古沢町	縄文～奈良
4 伊勢山中学校	弥生～中世
5 正木町	弥生～江戸
6 古渡城	戦国
7 富士見町	縄文～近世
8 松原町	弥生～中世

図1 古渡付近の遺跡群。南北に带状にややうすくなった所が熱田台地

ったため、古くは渡しだったということで古渡しと呼ばれたとされます。

新溝駅についても、「新しい溝(水路)」と理解するとこの問題が関係してきます。溝とはどのようなものかはっきりしませんが、南の台地上にある九町堀の地名とか鉄道の掘割などが溝ではないかという指摘もあります。しかし素朴に考えれば、海から川になった姿が「新しい溝」ととられたとしたほうが理解しやすいのではないのでしょうか。

(2) 古渡し付近の史跡

熱田台地には古くから名古屋地域の中心的な機能がありました。名古屋城から熱田神宮への「象の鼻」にたとえられる台地には、先史時代以来の多くの遺跡があります。

とくに古渡し地域には、北側と南側の東西に古代(奈良・平安時代前後)の遺跡があります。主なものは北側では西の松原遺跡等と東の富士見町遺跡で、古い遺物を出しています。また南側には、西に正木町遺跡と伊勢山中学校遺跡、東に古沢町遺跡があり、前者からは大きな建物跡が、後者からは平瓦や馬骨が出土して、愛智郡の役所や駅家の可能性が指摘されています。そしてその南には新しく発掘された金山北遺跡や、古代大型寺院と考えられる尾張元興寺遺跡、その東側の東古渡し遺跡へとつながっています。これらの遺跡を考えると、未だ決定的なものはありませんが、古渡し付近が新溝駅の有力候補になっていることはよく分かります。

残念ながら都市化が進んだ中では、遺跡はその土地が再開発される時にしか発掘調査が出来ません。このため調査地点は点々としたものになり、この付近の歴史の全体像が明らかになるには長い年月がかかりそうです。

(3) 尾張の元興寺

古渡し付近の史跡群の中でも古代遺跡として特に注目されるのが、少し南の金山総合駅西隣にある尾張元興寺遺跡です。

この元興寺は7世紀中頃まで遡ることのできる、東海地方では最も古い寺院とされます。創建は、当地に生まれ奈良元興寺で修行した道場法師とされており、その逸話が9世紀の『日本霊異記』に紹介されています。また884

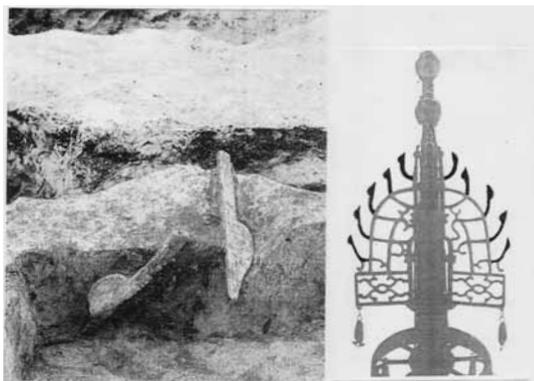


図2 元興寺で出土した「水煙」。突き刺って発見された。(そのため回収されず残存したと推定されている)

年に尾張国分寺(稲沢市)が火災にあった後、代わって国分寺に指定された「定額願興寺」がこの寺とされ、国分寺に次ぐ寺院だったと考えられています。

近年の発掘調査で多くの遺構や遺物が出土してその概要が明らかになりつつあり、寺域も奈良の法隆寺に相当するものだったと推定されています。残念ながら寺院本体の遺構は発見されていませんが、平成11年に、塔屋の上層部にある「水煙」が地面に突き刺さった形で出土し、高さ30^{センチ}以上と推定される塔のある大きな寺院建築の存在が具体的に示されました(図2)。

もちろん、寺院と道路の間には直接の関係はなかったと思いますが、熱田の宮や大寺院のあった近くを幹線道路が通ったことは十分想像できそうです。

3 紀行 古代の遺跡群から

… 古渡し付近を廻る …

露橋からの古道や古渡し付近の古代遺跡群は、今はどうなっているのでしょうか。古渡し付近の古代に思いをめぐらしつつ露橋から熱田台地の中央部を歩いてみます。

〈台地の西〉

前回の終点になった名鉄本線の山王駅から東に歩きます。鉄道のガードを確認すると、橋名は「三間机架道橋」とあり、ここには明治時代には水路が通っていたことが分かります。

さて東に向かうと、市道山王線はだんだん広くなり高速道路のある道になって堀川を渡ります。古代には堀川はありませんでしたが、



三間架道橋。この幅や約10m程になっている

付近は低く、山王線の付近は谷状になっていたようです。堀川を渡って東に台地を上がります。右側は正木町遺跡の区域です。この付近では鎌倉街道跡は南側の歩道付近にあったとされ、古代の直線道路がその前身だったと考えられます。歩道橋の手前を南に入ります。正木町遺跡は10mほどと大きく、マンション建設が盛んです。このため小規模ですがいくつもの発掘調査が行われ、多くの古代遺物が出土しています。

南に進むと正木公園の所から伊勢山中学校校遺跡の範囲になります。公園を過ぎた所で右に入ると閻森八幡社の裏手に出ます。保元の乱で活躍した源為朝とその子の故事がある所です。為朝の鎧塚を見て南の入口を出ます。右手はここも谷地形で、その先が海の頃は湊



正木公園付近。この下に史跡がねむっている



閻森八幡社。古代の終りからの歴史が残されている

だったという説があります。社の南側は伊勢山中学です。左に校地を周り南に進みます。ここの遺跡では東側の市営住宅から中世の地層からではありませんが多くの馬の骨が折りたたまれた形で出土しました。

まっすぐ進むと鉄道線路横の公園です。線路の向こうには今はマンション街ですが、古代は大きな元興寺という寺院がありました。点々とはありますが再開発前の発掘調査で、寺院の規模や構成が明らかになりつつあります。左に見える正木橋を渡り1本行くと右側に同名の元興寺があります。この寺は江戸時代にできたものです。今ではここに法隆寺クラスの寺院があったといっても想像もできません。南に行くと旧佐屋路で左にすぐ国道があります。



線路をはさんで見る元興寺跡。線路のむこうには、はみ出るくらいの寺だった

〈台地の東〉

国道を渡ると左に高層ビルがそびえます。ここは東古渡町遺跡です。ビル建設前の調査で十数基の古墳が見付かり、当時は墓域だったと考えられています。駅前に出て北に総合駅の通路を渡ります。ここの鉄道の堀割り、は拡幅されてはいますが、古くからあったのではないかという説もあるのです。

駅の北側の「明日なる」という商業施設一帯は、開発前に調査された金山北遺跡です。掘



金山の「明日なる」を西北から見る。ここが金山北遺跡になった

市民会館付近。工事で馬骨(伝馬の可能性)や平瓦が見つかった



地下鉄名城線の上にてきた葉場公園、台地の下だが、工事中にいろいろ出土したという



っ立て柱の住居など多くの古代の遺跡が見つかりました。右に信号を渡り、広い大津通を北に進みます。この通りは熱田台地の東縁に、明治時代、名古屋と熱田を結ぶ道として開設されました。少し行くと左手に市民会館があります。ここから北一帯が古沢町遺跡になります。会館の建設工事では馬の骨や平瓦が見つかったところです。

次の信号の1本北の道を右に下り、すぐ左の葉場公園を北に進みます。この先の線状の公園は地下鉄の上にあたり、工事ではいろいろな遺物が出土しました。公園を進むと左側の熱田台地との落差がよく分かります。古くは海岸線だったのででしょうか。道は山王線に出て、その先は高速道路のランプが通る坂道になります。ここから先の台地部が富士見町遺跡です。弥生時代を中心に住居跡がました。そして江戸時代には一時遊廓になり、その後文人たちの居住地にもなりました。

ランプの次の信号を西に、大津通りに出て左に戻ります。西側には戦国時代の古渡城跡があり、一部が公園になっています。中にある池は古くは入江だったとも。そのすぐ先は山王線で、地下鉄の東別院駅があります。



織田信秀が築城した古渡城の東側。公園内の池は元々の地形のようで、海が入り込んでいた所かもしれない

4 水路になった直線道路

露橋から古渡への道も、明治時代の地籍図にはその痕跡が残っていました。露橋で東に曲った直線道路は、その後、用水路として使われました。「三間杖」と呼ばれ、米野用水を堀川に落としていたといひます。

明治17年の露橋村の地籍図を見ると、まっすぐに東西に伸びる用水が目に入ります。そして水路の両側に帯状の土地があるのです(図3)。始めは水路の側道かと思いましたが、よくみると「畑地」になっており水路以前からのものと考えられるのです。水路が三間とすれば全幅員では15~18m程になり、まさに古代の直線道路の跡といえる幅員になります。さて、この道影はどこまで続いているのか。次への期待が湧いてきます。

〈主な参考文献〉

- ①企画展「あゆち湯の古代」(1998、名古屋市博物館)
- ②三渡俊一郎「愛智郡の郷域と新溝駅について」(1986、郷土文化)
- ③服部・木村・瀬戸「なごやの古代遺跡を歩く」(2008、風媒社)



図3 明治の地籍図にある東西の帯状の水路「三間杖」。両側にも帯状の区画が残っている